

情報化社会における子どもたちの 対象認知の特質

今 西 康 裕

要 旨

例えば、円錐というものの形状を正確に把握しようとすれば、われわれは最低限横からと上からという二方向からの視点を必要とし、これらを合わせることによって「円錐とは、横から見た場合には三角形に見え、上から見た場合には円に見える物体である」というおおよその説明を加えることが可能となる。

この事実が示唆するように、われわれが何らかの対象（ものや人）を理解する際には、いろいろな方向からの視点すなわち多面的・多角的な認知が必要とされよう。

しかし、今日においては、その現代性ゆえに、とくに子ども世代を中心にしてこの多面的・多角的な認知が困難化しており、またそこから様々な社会問題も統発している。

本論は、こうした一連のプロセスを追ったものであり、そこからの脱却を意識的に図るための第一歩たり得ることを期したものである。

キーワード 多面的認知, 社会的性格, 合理化,
アイデンティティ, 他者指向性

はじめに

本論は、著者自身のこれまでの発達諸段階における体験やそれに基づく実感、さらには種々の場面での子どもたちとのかかわりあいのなかから得た示唆を素地に、かれらがおかれた情報化社会という独特の社会的状況とかれらの社会的行為との媒介変数として、現代社会により広く一般化したと考えられる特徴的な対象認知の形式を想定し、子どもたちの現状について仮説構築を試みたものである。

そこから、本論はあくまで一つの理念型構築をめざしたものであり、「すべて」の子どもたちに該当する対象認知の特質を述べたものではないこと、また、その試みは探求途上の段階にあり、本論で提示する仮説は当然より広範に検証される必要があることを前置きしておきたい。

そうした上で改めて本論の概要を手短に述べれば、情報化社会として特徴づけられる現代の日本社会に暮らす子どもたちは、まさにその現代の日本社会を特色づける諸要因の所産とも言うべき特徴的な対象認知を行っており、さらにこの事実が、現代日本社会に生起するさまざまな社会問題の規定因となっているという一連のプロセスを明らかにしたものであると言えよう。

1. 「時代を映す鏡」としての子ども

結論から先に述べるならば、これから本論で論及するところの「特徴的な対象認知」は、個人差や年齢・性別の差異をも超越した、現代の日本社会に生きるわれわれ個々人により普遍的な特質、いわゆる社会的性格の露呈であるといえることができる。

とくに、高度情報化により、年齢のいかんにかかわらず大量の均一情報が入手し得る状況が現出するその一方で、各世代を区切る「共通体験」が消失しつつある今日においてはことさらである。

しかし、とくに子どもは、「時代の証人」・「時代を写す鏡」であるといわれる。かれらは、「純粋無垢」であり、価値観や認知の形式に関して既存のストックがないゆえに外部社会からのそれらを受容的にストレートな形で内面化し、またそれらを同様の形で表出しがちである。

また、年齢的・空間的に「今日的」情報に最もアクセスしやすいのもかれらであり、その上、激しい社会変動へ適応するため心理面での各世代の「青年化」や「アイデンティティの未決」もいわれる現状を考慮すれば、かれらこそ現代人の対象認知の特質をより象徴的、より原型的に、もっとも鮮烈な形で示す存在であるといえよう。

そこで、本論では、とくに、先行世代からの意図的・無意図的な社会化作用によって現代に特徴的な対象認知の形式と内容を自己自身のうちにほぼ取り入

れ、しかも（記憶力がその大部分を占める）学力という単一の価値基準の強い影響下におかれる中高生を考察の視点の中心におき、「現代性」の「もっとも忠実な体现者、代表者」としてかれらにアプローチしていきたい。

2. 今日における対象認知の特質としての多面的認知の困難化

本格的に議論を展開する前に、まず、これまで「特徴的な対象認知」と表現していたものの具体像は何なのか。これを明らかにすることが不可欠である。

これは、端的に表現するなら、一面的な認知、すなわち逆から言えば多面的認知の困難化と表現し得るであろう。今日われわれは対象を一本の座標軸上（あるいは平面上）においてとらえがちで、デジタル思考（＝一面的認知）をアナログ思考（＝多面的認知）よりも頻繁なものとする。

つまり、複数の価値基準をクロスさせて複眼的・立体的に（自分以外のものや人であるところの）対象を認知しようとはせず、排他的な単一（あるいは少数）のこれによる即断・即決が優位を占めるのである。

また、そこで「採用」される価値基準の多くは、（極端な場合、その価値基準単独で対象を「判定」しなければならないがゆえに、当然といえば当然ではあるが）正と負との両極の間の「距離」の短い、換言すれば、「目盛りの粗い」、「よいか悪いか」や「生か死か」といった明確な対称をなす二極からなる二元論的・二項対立的価値基準、「わりきれる価値基準」であり、中間項や「あいまいさ」¹⁾を排除し許容しない。

現代の子どもたちの「最低」や「チョベリグ」といった口癖もこうした他者を価値の両極へ位置づける傾向の表現と見なせよう。

また、これらの対象認知上の諸特徴を時代的にさか上れば、かつての封建社会においては、少なくとも「他者」というものの認知に関して、身分制度という他者を峻別する絶対的な価値基準が制度化されて存在し、本論のキーワードともいうべき多角的・多面的認知は実現し得なかった。

しかし、その後の時代の変遷は、人権思想の伸長、価値観の多様化を進行させ、われわれは各自さまざまな価値観・価値基準に準拠しつつ対象の多角的認知をはかることが可能となった²⁾。

だが、実際には、いかなる社会も「ホンネ」の部分でその維持・存続に有益な価値・特性（だけ）を「優遇」し、諸価値を序列化するのであり³⁾、また後述する現代社会に特有の諸要因によっても、対象の多角的認知は依然として困難な状況にあるといえるのである。

さらに、比較文化論的な文脈においても、日本社会には歴史的に対象の多面的認知を阻害する文化的要因が存在したといえる。

すなわち、日本人の集団主義志向はかねてより「みんなで一緒」に対象の側面を「凝視」する習慣を形成し、また「市民社会の一成員」としての意識が乏しく、内集団・外集団を峻別する性向が顕著な日本人は、他の国々の人々と比べても「異質な他者」に対する寛容度が従来から低いのである。

3. 「現代」の所産としての多面的認知の困難化

これまでに述べた多面的・多角的認知の困難化は、社会病理学や批判理論の視点を持ち出すまでもなく、現代の日本社会を特色づける諸要因の所産であるという側面をも有している。

すなわち、日本社会のみならず近代社会の特質というべきものは、一言で言うならば、合理化の進展であろう。

そして、これをさらに分析的に見れば、この合理化の進展を可能にした基本的社会変化として次の四つを挙げることができる。

- 科学技術の進展、高度化
- 分業化・専門化（社会の合理化を担う人材の養成機関としての学校教育の充実、を含む）
- 競争化
- 管理化（当然、教育の領域についてのものをも含む）

これら四つの社会変化は互いに密接に関連しあいながら互いに促進され、全体として社会の合理化を促進したのである。

そして、その結果として、より具体的には、周知のごとく日本は世界有数の先進工業国となり、さらに経済の高度成長をも経験するにいたったが、その反面、これらの社会変化は、同時に人々の間に本論で主題とするところの多面的・

多角的認知の困難化をももたらしたのである。

こうしたいわば「社会の合理化の潜在的逆機能としての多面的認知の困難化」の因果連鎖は非常に複雑であるが、あえて大別すれば三つの方向からこれをまとめることができる⁴⁾。

まず、多忙化や疲労・欲求不満の堆積によって対象を多面的・多角的に認知する物理的さらには肉体的・精神的余裕が低減したという時間的要因が挙げられよう。

科学技術の進展は、マス・メディアの発達さらには情報化社会の到来をもたらした、情報量の増大を結果させた。これによってわれわれは情報を処理するための時間をいやおうなく拡大させたのである。

また同時に、科学技術の進展は、社会変化の常態化を招来させ、絶対的価値を消失せしめたために、即応の必要性が増大するとともに「今」重視の風潮も支配的となったのである。

さらに、科学技術の進展は、「技術が進歩すれば時間ができる。時間ができれば仕事が入る。」の言葉通り、ストレートにわれわれの仕事量を増加させるとともに、専門化の進展ともあいまって「習得すべき」知識技術の増大をもたらした。

また、競争化の傾向は、選別や「敗者」の排除を進行させ、全体としての社会風潮もわれわれに「常に管理されている」、「居場所がない」という圧迫感を醸成させしめたのである。

次に、空間的要因が挙げられよう。

すなわち、今日においては、(対象認知の)画一性、他律性を促進させる状況が数多く現出しているのである。

ここでもやはり科学技術の進展は、「多面的に認知する必要がない」不変的で一面的な人工物を増大させるとともに、情報化社会を到来させたことによって、「感性の時代」やテクノ依存症による「立体的」把握の減少を招いた。

また、専門化は「自らの専門的地平からしか対象を認知することができない」傾向性を、競争化は「『競争種目』への集中から対象の多面的認知が阻害される」状況を、それぞれ生じさせた。

さらに、「『与えられたものをそのまま受け取る』他律的な姿勢からは対象の

多面的・多角的認知は生じない」にもかかわらず、社会の管理化はその進展の度合いを一層強めたのである。

最後に、人間間の直接接触の減少が対象の多面的・多角的認知の困難化を招いたという人的要因を指摘することもできよう。

先にも触れたように、今日われわれは総じて多忙化しており、また科学技術の進展、情報化社会の到来によって「直接（人と人が）かかわる必要がない」状況が生じてきている。さらには、各分野・部門における専門化の進行がいわゆる「専門閉塞」状況を広範なものとしている⁵⁾ことや核家族化などによって人間間の結びつきが希薄化しているのである。

また、さらに観点を換え、蛇足を加えるならば、以上の三つの要因の他にも、特に日本社会においては、明治期以降これらの社会変化が政府によって上から人為的に創出されてきた側面が強いという事実そのものが、対象の多面的認知を困難化させる一要因となり得たということもできよう。

「富国強兵」・「殖産興業」のスローガンのもと、「官主導」でいわゆる「欧化政策」を推し進め、社会の近代化をはかってきた日本社会においては、国民各人の内発的なものでない「上」からの改革の実行、欧米（のみ）の模倣（逆から言えば、アジア諸国などの無視）が、人々の受動性や皮相的な対象認知を生み出す一要因となったのではないかと考えられるのである。

4. 現代の社会問題の規定因としての一面的な対象認知

現代社会の諸特質から生じる対象の多面的認知の困難化という事態は、ひるがえってまた今日生起する種々の社会問題の「母体」、規定因ともなるのである。

すなわち、一面的な対象認知の結果、まず個々人のうちに優越感と劣等感とが速成される。

本来人間は多面的な存在であり、容易に「評価」することはできない。にもかかわらず、このように多面的な人間をモノのように一面的にとらえるところから、「安易」な優越感や劣等感が生じやすくなり、そこからさらには権威主義的性格、E・フロムのいうところの「サド・マゾ的性格」の成立が促される

のである。

また同時に、対象の拒否と受容への分化も進行する。

つまり、一方でいじめ場面における傍観者の態度や政治的無関心に象徴されるような、自分には関係ないと判断した対象に対する徹底した無関心によって、他者との接触機会のさらなる減少や（自らとかかわりのないことは深く考えないところからくる）他者の意見への安易な従属・依存、「型」への固執、さらには対象の一面の認知の再生産・固定化、想像力・想像力の低下が招来されるとともに、他方では、いわゆる「おたく」に代表されるような自己がポジティブな評価を与えた対象に対する没頭や「やさしさ」の表出がなされる。

しかし、後者の場合においても、（一つの事柄に没頭することによって）人は広く他の事柄まで見渡すことができず、ますます「視野」を狭くするため、多面的認知が困難化する循環が繰り返されたり、関係性を維持するため自己の多面性を抑圧したりするといった結果が招かれる。

また、対象への没頭により、（比較する他の対象を失うこともあり）その対象への視線がさらに単眼的となり、対象の側のわずかな変化にも「裏切りだ」、「想定外だ」などと動揺してしまうといった過敏さ、「傷つきやすさ」の増大も見られるようになり、さらにそこから「他者は自己を傷つける恐ろしいもの」という意識が顕在化して、対人関係の忌避や「ひきこもり」が導かれたり、一面的かつ不変の存在であるため、認知の誤りがなく、決して自己を傷つけることのないモノや感覚、幻想への志向が高まりを見せることも多い⁶⁾。

さらに、以上のようなプロセスを経て、多面体としての人間を一面的に「モノ」視する傾向性はますます強固なものとなり、以下に示すような四つのルートからそれぞれ問題行動を帰結させる。

- 対象への安易な優越感+対象の拒否→いじめ加害行為、対象の無視、対象への虐待
- 対象への安易な優越感+対象の受容→対象に対する溺愛、過保護
- 対象への安易な劣等感+対象の拒否→不登校（登校拒否）、とじこもり
- 対象への安易な劣等感+対象の受容→いじめ被害者への同化

また、自分をも他者をも共に多面的に認知できないままの現代人は、競争社会たる現代社会において多く劣等感を抱きがちであることもあわせて⁷⁾、ア

アイデンティティの確立を困難化させるのである⁸⁾。

その結果、かれらは容易に自己が不安定化しやすい。換言すれば、ここでもかれらは「傷つきやすい」自己を有するようになると言えるのであり、またそのために種々の過剰な自己防衛（≒エゴイズム）行動に走りがちなのである。

すなわち、まずかれらは、（自己とは）異質な他者とのかかわりあいや関係性の構築を拒否・拒絶する態度を強化・徹底する。これは、かれらにとっての「異質な他者」は自己に激しい動揺を与える可能性をもった存在であり、そのために（かれらからの影響によって）自己が「壊れる」ことを恐れるところからの行動であるが、逆にこのことによってかれらは自己の多面的・多角的認知およびアイデンティティの確立をさらに困難なものとするのである。

また同時に、「当事者責任」を問われ自己に負の影響が及ぶことを恐れるところから、傍観者の態度に徹する姿勢も顕在化するとともに、不安定化しがちな自己から目をそらし、積極的にかかわろうとしないアイデンティティ確立の無制限な先延ばし、自己の放置や自己への無関心も日常化するようになる⁹⁾。

さらに、かれらは深まる人間関係や自己の不安定性を想起させるような深遠な思考を忌避するようになる¹⁰⁾。

これは、当事者間の関係性が深まれば、（自らの不安定な自己の内面が露出して）お互いの「あら」が目につく可能性が高まり、これを指摘されれば自己は一層不安定化するためであり、また、他者の「あら」が明らかになれば、これを許容するだけの寛容さをもたない現代人にとって、お互いにその関係性を保つことは困難となるためなのであり、換言すれば、対人間で生じる可能性のある摩擦を事前に回避するための一方策ともいい得るのである。

しかしまた、たとえ他者を（物理的・精神的に）傷つければ、その反作用が自己に及ぶ危険性があり、他者を傷つけないための配慮の一つとしてもこのような傾向性が顕著なものになるとしても、そのために対象の多面的認知がますます阻害され、これまでに述べたようなプロセスが繰り返されるという循環の構図ができあがるのもまた反面の事実なのである。

また、人々は、お互いに他者が自己の特定の側面にしか着目しないことを知っているために、他者がどのような価値基準をもって自己のどの側面に着目するかに常に過敏となり、そうした他者の「視線」になかった自分を演じようとす

るところからも一層他者指向性を強める。

（他者との）摩擦回避という消極的動機と他者に受容されたいという積極的動機とがあいまって「他者に従っておけば安全・安心」という心理が醸成されるところから人々はより積極的な他者追隨を行い、（他者の「メガネにかなった」自己を演じ）他から与えられた視点を甘受する傾向を強める。しかし、このことは反面、各人が自分自身の現実の全体像をしっかりと見つめようとしないうちにもつながり、その結果、ここでもやはり自己の多面的認知ひいてはアイデンティティ確立のさらなる困難化が招来されることとなるのである。

さらに最後にもう一つだけ付言するとすれば、対人関係を対（ペットを含む）モノ関係で代償しようとする者の姿にも、ここでとり挙げているところの自己防衛の心理がうかがわれる。

モノは「一面的」であり、二元論的な価値基準でわりきりやすいため、またモノは常に「一定の態度」で接してくれ、絶対に（不安定な）自己をも攻撃し傷つけることがなく、安心できるため、またそこから無理に「偽りの自己」を演じる必要もないがゆえに、人はこれに熱中し没頭するのである。しかし、この事実もまた当然のごとく、一方で対人関係の希少化・希薄化を結果させ、アイデンティティ未確立へと至る循環の道を用意するのである。

5. 多面的・多角的な対象認知の獲得に向けて

以上に見てきたように、今日多面的・多角的な対象認知が困難化し、その結果として種々の、しかも「やり直し」の効かないような重大な影響がわれわれの社会生活の多くの側面に及んでいるとすれば、このあたりでやはりこうした対象認知の意識的な変革が必要であろう。

その詳細についての議論は、後の機会に譲ることとしたいが、ここではその変革の可能性について触れておきたい。

楽観的に過ぎる、とのそしりを受けるかも知れないが、こうした変革を後押しする諸条件はすでにいくつか散見し得るのである。

すなわち、今日まさに技術革新や情報化の進展などがその大きな原動力となっていて、「ゆとり」の時代の到来がいわれるが、この（心身両面における）ゆとり

を対象認知の際に大いに活用し、より主体的・多角的な認知がはかれるようにもっていくことはできないだろうか。

また、環境問題の深刻化などにもなあって、あらゆる生物種にわたる「共生」の思想が広がりを見せているが、この共生思想こそ自他の異質性を相互に承認し尊重しあいながら共に生きる、とするものであり、まさに多面的・多角的な対象認知に基づくものであって、その普及は、また同時に先のような対象認知をも一般化させる契機となるではないかと期待されるのである。

さらに、日本の風土的特性に着目した場合にも、同一の地理的空間において四季の変化があり、その景観が周期的にせよ著しく変化するという事実は、多面的・多角的な対象認知により親和的な土壌が用意されているといえるのではないかと考えられるのである。

註

- 1) これは、本来きわめて人間的なものでありながら、今日のようなコンピュータ化し「正確を期す」社会においては親和的なものではない、排除されるべき対象なのである。
- 2) 具体的には、「人間一人一人は何物にも代えがたいかけがえのない存在である」という言説がこれを象徴している。
- 3) この事実から、人は決してすべての対象を「平等」に認知しているわけではないが、これはまた決して「自由」にすべての対象を認知した結果ではない、ということがいえよう。
- 4) また、他には、個人の内部要件からの制約と外部要件からの制約に大別することもできよう。もちろん、これらの分類も理念型的なもので、実際の諸要因の多くは「境界例」的であることも付言しておかなければならない。
- 5) いわゆる学校の「教育独占」による家庭や地域教育力の低下や（子どもの）社会化のエージェントの（母親への）限定もその一つとして例示することができるだろう。
- 6) その一例として覚醒剤などの薬物の中高生にまでの浸透が挙げられるかも知れない。かれは「今さえ快適で気持ち良ければそれでよい」という短絡的で一面的判断からこれらに手を出すのである。

- 7) 「劣等感が自己確立を阻害する」のである。
- 8) アイデンティティとは、多数者とのかわりあいのなかで、まさに自己の多面性を認識し統合した結果としてできあがるもの、自己の総合的評価というべきものであろう。
- 9) その一つの典型として、「コスプレ (= コスチューム・プレイ)」に熱中する若者を挙げることができよう。かれらは、マンガやアニメのキャラクターに自己を重ねることによって普段感じられないような安定感を得、精神の平静を維持しているのである。
- 10) かれらの用語法で表現するならば、「こい」関係性や「マジ」で「おもしろい」話題を避けるのである。

参考文献

- (1) 井上俊 他編『自我・主体・アイデンティティ』(岩波講座 現代社会学 第2巻) 岩波書店 1995年
- (2) 井上俊 他編『こどもと教育の社会学』(岩波講座 現代社会学 第12巻) 岩波書店 1996年
- (3) 鮎川潤『少年非行の社会学』世界思想社 1994年
- (4) 徳岡秀雄『社会病理を考える』世界思想社 1997年
- (5) 栗原彬『くやさしさの闘い』新曜社 1996年
- (6) 深谷和子『「いじめ世界」の子どもたち』金子書房 1996年
- (7) 梶田勲一編『自己という意識』(現代のエスプリ307) 至文堂 1993年
- (8) 見田宗介『現代日本の感覚と思想』講談社学術文庫 1995年
- (9) 大平健『やさしさの精神病理』岩波新書 1995年
- (10) 本田和子『異文化としての子ども』ちくま学芸文庫 1992年

(いまにしやすひろ 大阪摂津福祉専門学校専任教員)

Young people's specificity of cognition in modern information oriented society

Yasuhiro Imanishi

To understand or grasp exactly in all things, we have to have multiple cognition in regard to those.

But, in modern Japanese society, people especially young people have been difficult to have such cognition.

What is reason for this? And what this give rise to? this study try to make clear with those, in other words, it gives attention to multiple cognition as intervening variable between modernity and social action in this place.